



平成23年創始 武州狭山発祥
 同人結社 鬼姫狂団世界総本部
 偶像即神 萌燃一体 活劇至上 童心回歸
<https://www.onihimekyo.com/>

鬼神童女遊侠伝番外編 狙われた少女たち 愛玩奴隸調教地

「 空
 狙 鬼 想
 わ 神 霊
 れ 童 武
 た 女 劇
 少 遊 ㊦
 女 侠
 た 伝 ㊦
 ち ㊦ 番
 / 外
 愛 編
 玩
 奴
 隸
 調
 教
 地
 」

作
 ・
 民
 富
 田
 智
 明



を の 繰 一 下 頭 ま き 郎 る じ 刺 快
 獲 絆 堅 り 騎 達 領 堅 く 刺 は の 手 自 頭 刺 し 楽
 得 が 次 広 打 の 次 っ し 、 を 下 動 領 は て に
 す 一 郎 げ ち 自 い 郎 は 、 達 小 は 、 倒 す 浸
 る 層 は 、 末 臨 小 野 、 倒 す 。 銃 を 処 刑 下
 。 強 清 子 、 殺 る 乱 に と 人 を 奪 っ た 自 動 小 銃 手
 固 と 少 女 達 は 頭 領 を 倒 す 。 死 闘 を の
 と な り 、 少 女 達 を 解 放 し 、 清 子 と
 な り 、 少 女 達 を 解 放 し 、 清 子 と
 少 女 達 の 信 頼 と 恋 心

を の 繰 一 下 頭 ま き 郎 る じ 刺 快
 獲 絆 堅 り 騎 達 領 堅 く 刺 は の 手 自 頭 刺 し 楽
 得 が 次 広 打 の 次 っ し 、 を 下 動 領 は て に
 す 一 郎 げ ち 自 い 郎 は 、 達 小 は 、 倒 す 浸
 る 層 は 、 末 臨 小 野 、 倒 す 。 銃 を 処 刑 下
 。 強 清 子 、 殺 る 乱 に と 人 を 奪 っ た 自 動 小 銃 手
 固 と 少 女 達 は 頭 領 を 倒 す 。 死 闘 を の
 と な り 、 少 女 達 を 解 放 し 、 清 子 と
 な り 、 少 女 達 を 解 放 し 、 清 子 と
 少 女 達 の 信 頼 と 恋 心



平成23年創始 武州狭山発祥
同人結社 鬼姫狂団世界総本部
偶像即神 萌燃一体 活劇至上 童心回歸
<https://www.onihimekyo.com/>

鬼神童女遊侠伝番外編 狙われた少女たち 愛玩奴隷調教地

の 堅 活 学
一 次 躍 生
員 郎 に 、
に の よ 中
な 妹 り 学
る に 救 生
。 な り わ 、
「 初 全 高
代 員 校
関 恋 生
東 心 幅
入 を 広
間 抱 い
屋 く 。
一 。 次
家 後 郎
「 に の



○ 町中のどこかの道路

車が走り去って行く。
 押し込まれる。
 少女達は、覆面男達に抱えられ、車に
 を覆われて眠らされる。
 品を染み込ませたハンカチで口と鼻
 少女達は、覆面男達に取り囲まれ、薬

（18〜）が降りてくる。
 車が少女達の前に止まり、覆面の男達
 いく。
 一台の車が背後から少女達に近づいて
 が各々雑誌を手にしながら歩いている。
 下校中の小学生の少女四人組（6〜9）

○ 町中のどこかの道路

字幕 武州入間地方
 秩父山地を望む静かな住宅地。

○ 町の遠景



○ 郊外のどこかの道路

てくる。そこに、二台の誘拐実行犯の車が走つ

領（18）が立っている。

前に割と精悍な面構えの誘拐団の頭

一台の車が路肩に停まっている。車の

のどこかの道路

車が走り去っていく。

押し込まれる。

少女達は、覆面男達に抱えられ、車に

を覆われて眠らされる。

品を染み込ませたハンカチで口と鼻

少女達は、覆面男達に取り囲まれ、薬

降りてくる。

車が少女達の前に止まり、覆面男達が

いく。

一台の車が背後から少女達に近づいて

各々雑談しながら歩いている。

と高校生の少女二人組（15）が

下校中の中学生の少女二人組（12）



頭領「まあ、楽しみに待ってるよ。いざれ分

さうかよ」

頭領「ガキの小遣い目当てでこんな山奥まで

高校生2「お金なんてないわよ」

高校生1「どうする気なの？」

少女達「怯えて座り込む。」

手下達が荷物置いて拳銃を手取る。

「え、なるなよ。死にたくなければ」

「るか、そこです。座ってろ。逃げようなんて考

頭領「ここでしばらく野営する。テントを張

てくる。」

「男達は、適当なところで立ち止まり、

頭領と手下達が、少女達を連れて歩い

○平地の森の中

を連れて、森に入っていく。



堅 清
 次 し 子
 郎 て 「
 「 た お 水 堅 な 樹 長 息 (入 〇
 こ ん 兄 分 次 ない 林 時 を 1 間 だ
 ん だ ち 補 郎 だ い 帯 間 を 8 こ
 な の ちゃ 給 と 清 子 延 歩 汗 だ 3 の
 の ン 、 する 。 が 々 続 だ だ 9 登
 楽 、「 っ も 立 続 け だ だ 一 山
 な 方 っ こ 止 っ いて っ っ っ 道
 方 だ っ こ 止 っ いて っ っ っ 尾
 だ よ 。 っ こ 止 っ いて っ っ っ 根
 平 坦 な 尾 根 歩

「お兄ちゃん、いつもこんなきつい運動
 水分補給をする。
 堅次郎と清子が立ち止まって一息つき、
 ない。
 樹林帯が延々と続き、眺望はまったたく
 長時間歩き続けている様子。
 息を荒げて汗だらだらになっており、
 (18)が歩いている。
 入間原堅次郎(39)と春小路清子

〇
 ど
 こ
 か
 の
 登
 山
 道
 ・
 尾
 根
 筋
 ない。
 め、少女達は茫然と座っているしか
 かっていく。見張りが立っているた
 頭領が手下達とテントの設営に取り掛
 す。
 達は生理的な嫌悪感を露骨に顔に出
 頭領のニタニタ品のない笑みに、少女



清子「十分運動にはなってるし」
 堅次郎「まだ午前中だし、余裕はある。遅く
 なりそうなら引き返しゃいい」
 清子「適当なのね」
 堅次郎「わかんない感じだよ。引き返して
 の？」
 清子「わかんない。大丈夫なの？」
 堅次郎「植林だろ。うけど自然は自然だろう」
 清子「これぞ大自然」
 堅次郎「俺も初めてのところだっ
 てくれると思っただけだ。俺も初めてのところだっ
 きが多いし」
 清子「もっと思っただけだ。俺も初めてのところだっ
 景色が綺麗なところ
 に連れてっ



堅	清	○	清	堅	清	○	清	堅	清	○
次	子	平	子	次	子	ど	子	次	子	ど
郎	「	地	「	郎	「	こ	「	郎	「	こ
堅	「	の	堅	「	ど	堅	堅	「	こ	堅
次	道	森	次	それ	頂	次	次	う	れ	次
郎	標	の	郎	は	上	郎	郎	く	ど	郎
と	全	中	と	そう	に	と	と	ん	っ	と
清	然		清	う	立	清	清	。右	ち	清
子	ね		子	だ	つ	子	子	に	？	子
が	え		が	けど	こ	が	が	行	「	が
歩	な		歩	：	と	一	右	っ		歩
き	：		い	：	だ	本	の	て		い
続	：		て	「	け	道	道	み		て
け	「		い	く	が	を	へ	よ		き
る			く		目	歩	歩	う		て
。					的	い	い	「		、
					じ	て	く			分
					や	い				か
					な	く				れ
					い					道
					「					



頭 頭 堅 頭 清 堅 頭 堅
 領 領 次 る 領 子 次 娘 ぼ で 高 に 調 頭 堅
 「 「 郎 ぜ 「 お 頭 最 一 郎 少 仕 ぼ う け 生 仕 教 「 郎
 手 手 そ 手 立 「 ° お 頭 最 一 少 仕 ぼ う け 生 仕 教 知 「
 枷 下 手 下 場 一 俺 が 領 低 外 女 込 何 し 商 の 込 ん で ° 知 「
 足 達 つ 達 が 分 な 念 の 清 低 道 の 込 ん で ° 俺 が いた の
 枷 が を が かつ こ 入 連 子 一 絶 は 都 合 が 誰 に も 奥 だ ° 泣 こ う が 叫
 を 堅 次 郎 乗 せ ろ 「 打 する ° 高 値 で 売 れ 娘 を 仕 込 ん で 何 し よ う が 誰 に も 奥 だ ° 泣 こ う が 叫
 は 次 郎 を 調 教 台 に 連 れ て 行 き、 高 生 仕 込 ん で よ、 富 豪 に 売 り 渡 す ん だ ° 小 中
 め 次 郎 を 調 教 台 に 連 れ て 行 き、 高 生 仕 込 ん で よ、 富 豪 に 売 り 渡 す ん だ ° 小 中
 て 次 郎 を 調 教 台 に 連 れ て 行 き、 高 生 仕 込 ん で よ、 富 豪 に 売 り 渡 す ん だ ° 小 中
 固 次 郎 を 調 教 台 に 連 れ て 行 き、 高 生 仕 込 ん で よ、 富 豪 に 売 り 渡 す ん だ ° 小 中
 定 次 郎 を 調 教 台 に 連 れ て 行 き、 高 生 仕 込 ん で よ、 富 豪 に 売 り 渡 す ん だ ° 小 中
 す 次 郎 を 調 教 台 に 連 れ て 行 き、 高 生 仕 込 ん で よ、 富 豪 に 売 り 渡 す ん だ ° 小 中
 る 次 郎 を 調 教 台 に 連 れ て 行 き、 高 生 仕 込 ん で よ、 富 豪 に 売 り 渡 す ん だ ° 小 中
 。 次 郎 を 調 教 台 に 連 れ て 行 き、 高 生 仕 込 ん で よ、 富 豪 に 売 り 渡 す ん だ ° 小 中
 連 次 郎 を 調 教 台 に 連 れ て 行 き、 高 生 仕 込 ん で よ、 富 豪 に 売 り 渡 す ん だ ° 小 中
 れ 次 郎 を 調 教 台 に 連 れ て 行 き、 高 生 仕 込 ん で よ、 富 豪 に 売 り 渡 す ん だ ° 小 中
 て 次 郎 を 調 教 台 に 連 れ て 行 き、 高 生 仕 込 ん で よ、 富 豪 に 売 り 渡 す ん だ ° 小 中
 行 次 郎 を 調 教 台 に 連 れ て 行 き、 高 生 仕 込 ん で よ、 富 豪 に 売 り 渡 す ん だ ° 小 中
 き 次 郎 を 調 教 台 に 連 れ て 行 き、 高 生 仕 込 ん で よ、 富 豪 に 売 り 渡 す ん だ ° 小 中
 、 次 郎 を 調 教 台 に 連 れ て 行 き、 高 生 仕 込 ん で よ、 富 豪 に 売 り 渡 す ん だ ° 小 中



首元短刀を近づける。手下が堅次郎の体をがっちり押しさえ、

ねんごろに埋めてやるよー

手下え。せめてもの情けだー

手下1。さすがに娘達の前でバラしたくはね

手下2。何キロあるんだよー

堅次郎。二人は堅次郎を適当に転がす。

○平地の森の中。ゴミ置き場

べる。頭領はニタニタ品のない笑みを浮か

ちやおけねえよー

頭領「この野営地を見られた以上は、生かし

いく。



堅
 次
 郎

銃 堅 ー 手 陰 堅 し 手 た も 刺 堅 手 手 ー 刺 飛 堅 手 来 手
 弾 次 ー 下 か 次 回 下 の う す 次 下 ぐ す び 次 下 来 下
 は 郎 ー お が ら 郎 回 る が に う ー 刺 郎 は ー お 出 郎 は 通 る が
 手 が お お 堅 手 は 、 ー っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ
 下 自 お お 次 下 を 自 動 小 銃 を 構 え て 、 堅 次 郎 を 探
 を 動 小 銃 を ぶ っ 放 す 。
 外 れ る 。
 手 下 が 通り過ぎていく。
 堅 次 郎 は 、 その 隙 を 狙 っ て 木 の 陰 から
 飛 び 出 し 、 手 下 の 脇 腹 に 短 刀 を 突 き
 刺 す 。
 手 下 が 倒 れ る 。
 堅 次 郎 は 、 す か さ ず 手 下 の 胸 を 短 刀 で
 刺 す 。
 手 下 が 力 尽 き る 。
 も う 一 人 の 手 下 が 、 仲 間 が い な く な っ
 た の に 氣 づ い て 引 き 返 し て く る 。
 手 下 が 自 動 小 銃 を 構 え て 、 堅 次 郎 を 探
 し 回 る 。
 堅 次 郎 は 、 自 動 小 銃 を 奪 っ て 構 え 、 物
 陰 か ら 手 下 を 狙 う 。
 手 下 が 堅 次 郎 に 近 づ い て く る 。
 堅 次 郎 は 、 手 下 が 通り過ぎていく。



○
 テ
 ン
 ト
 の
 中
 で
 首
 元
 の
 ボ
 タ
 ン
 を
 外
 す
 。
 興
 奮
 し
 て
 息
 の
 荒
 い
 頭
 領
 が
 、
 上
 着
 を
 脱
 い
 な
 が
 ら
 疲
 弊
 し
 き
 っ
 て
 い
 る
 。
 調
 教
 台
 に
 拘
 束
 さ
 れ
 た
 清
 子
 が
 、
 涙
 を
 流
 し
 い
 、
 手
 下
 が
 現
 れ
 た
 方
 角
 へ
 歩
 き
 出
 す
 。
 堅
 次
 郎
 は
 、
 持
 て
 る
 だ
 け
 の
 銃
 器
 弾
 薬
 を
 奪
 い
 て
 い
 く
 。
 堅
 次
 郎
 は
 、
 恐
 る
 恐
 る
 倒
 し
 た
 手
 下
 に
 近
 づ
 っ
 つ
 、
 撃
 ち
 返
 す
 。
 堅
 次
 郎
 が
 物
 陰
 に
 身
 を
 隠
 し
 、
 銃
 撃
 を
 避
 け
 手
 下
 が
 自
 動
 小
 銃
 で
 追
 撃
 す
 る
 。
 堅
 次
 郎
 が
 走
 っ
 て
 逃
 げ
 る
 。
 る
 。
 銃
 弾
 が
 堅
 次
 郎
 の
 す
 ぐ
 脇
 の
 草
 を
 四
 散
 さ
 せ
 手
 下
 が
 自
 動
 小
 銃
 を
 ぶ
 つ
 放
 す
 。
 「
 う
 お
 お
 お
 お
 お
 つ
 !
 」



頭領 「これだけ引っぱたかれても音を上げないとは、大したもんだな」

清子 「あなたなんか、屈しないわ……」

頭領 「なら、これならどうかない？」

清子 「やめて！」

頭領 「俺は調教師だぜ！」

頭領が、少女達を容赦なく足蹴にし始める。両脇から手下達が銃を構えているので、抵抗しようがない。

少女達が苦痛で泣き喘ぐ。

清子 「やめて！ やめて！」

頭領は少女達を足蹴にし続ける。

堅次郎 「うおおおっ」

堅次郎がテントに飛び込んできて、手下達を狙って自動小銃をぶっ放す。

清子 「お兄ちゃん！」

手下達は、撃ち返す暇もなく被弾して倒れる。少女達が悲鳴を上げる。



堅次郎が転がるように倒れる。

堅次郎が立ち上がる。

頭領が立ち上がる。

頭領が倒れて、頭を押さえてのたうち

頭領「ぐああっ」

思い切り頭突きをする。

だが、堅次郎は、頭領の肩をつかみ、

突き刺そうとする。

頭領がしゃがみ、短刀で堅次郎の胸を

頭領「お兄ちゃんもこれまでだな」

堅次郎がぐったりする。

ら落ちる。

ける。踏みつけの拍子に短刀が手か

頭領がさらに蹴り込み、さらに踏みつ

堅次郎が転がるように地面に突っ伏す。

○平地の森の中・テントの外



頭領「弾切れか！」
 堅次郎がテントに入ってきて、頭領に
 向けて短刀をぶん投げる。
 頭領が拳銃に持ち換えようとした瞬間。
 だが、弾が発射されない。
 頭領が引金を引く。
 少女達が悲鳴を上げる。
 頭領が少女達に自動小銃を向ける。
 頭領「おめえら全員道連れにしてやる！」
 て構える。
 頭領は置いていた自動小銃を手につ
 頭領がテントに入ってくる。
 テントの中
 の後を追う。
 堅次郎がよろよろと立ち上がり、頭領
 向かっていく。
 頭領の方が早く立ち上がり、テントに
 うとす。
 堅次郎と頭領が突っ伏し、立ち上がる



○ 森の入口と清子、少女達が森から出てく

少 女 達 「 いる。少女達は涙を流して堅次郎を見つめて

堅 次 郎 「 首輪を外していく。自由だからね」

堅 次 郎 「 もう大丈夫だ。自由だからね」

堅 次 郎 「 堅次郎が清子を抱き締める。もとに行き、

堅 次 郎 「 痛かったらう」

清 子 「 叩かれただけ：：」

堅 次 郎 「 酷いことされてないか？」

清 子 「 お兄ちゃん！」

堅 次 郎 が調教台の清子に駆け寄る。

頭 領 「 ぐあっ」

短 刀 が 頭 領 に 突 き 刺 さ る 。

頭 領 は 力 尽 き て 倒 れ る 。

